

# 山と博物館

第33巻 第6号

1988年6月25日

大町山岳博物館



T. Hori, shot.

YARIGATAKE, FROM THE N.E.

[P. 92]

## T・HORIの写真「北東より見たる槍ガ岳」(ウエストン著「日本アルプス登山と探検」より複写)

### T・HORIの山岳写真

ここに掲げたT・HORIの写真はウエストンの「日本アルプス登山と探検」より転載したものである。

明治の中頃、既にウエストンの本に日本人の写真が掲載されていることに関心がもたれ、これまでに多くの人が調べている。このT・HORIは明治時代松本で写真館を開業した保里高政であるが、実際に山の写真を撮影したのは弟子の写真技師の安藤鶴一郎である。この写真は槍沢の天狗原入口附近から撮影したものであるが、明治二十七年八月、ウエストンから槍穂高の写真撮影を依頼されて安藤は入山したので、この時のものと思われる。ウエストンは明治二十四年八月、横尾本谷より天狗原経由で槍ガ岳をめざしたが、悪天候のため槍の肩で引きかえした。翌年八月には二度目の挑戦で槍沢から槍ガ岳登頂を果たしている。安藤は槍ガ岳周辺に詳しいウエストンにいろいろと教えられて撮影したものでなかろうか。

保里高政は明治時代早くも山岳写真に着目し、弟子の安藤を各地に派遣して山岳写真を撮らせたので、槍穂高の他に白馬、御岳など山岳写真が数多くあったとのことだが、現在T・HORIの残された写真は、人物、松本の風景などで、山岳写真はウエストンの本以外には残念ながら見当たらない。ウエストンは日本各地の山に登り、明治二十九年「日本アルプス登山と探検」をロンドンで出版したが、明治三十五年槍ガ岳へ登った小島烏水、岡野金次郎らが偶然にこの本にめぐり合い、それが機縁でウエストンとの親交がはじまり、やがて日本山岳会が誕生することになる。槍ガ岳が取り持つ縁で近代登山が始まったのである。小島、岡野が「日本アルプス登山と探検」に出会い、自分達の登った槍ガ岳はじめ乗鞍岳や飛驒の山々の写真を見て大いに驚くと共に強い衝撃を受けたという。

T・HORIの山岳写真は日本山岳写真史上最初のものであり、また近代登山の黎明を告げる歴史的価値の高いものである。

(穂苅貞雄)

# 幻の山岳写真—保里写真館—

穂 莉 貞 雄



T・HORIの写真「南東より見たる穂高岳」

(ウエストン著「日本アルプス登山と探検」より複写)  
 このT・HORIは、いかなる人物かにつき、  
 毎年六月の第一日曜日には、上高地でウェ  
 ストン祭が盛大に行われている。明治時代、  
 宗教登山、学術のための登山、或は狩猟など  
 のための登山しか知らなかった日本人に、山  
 登りそのものを楽しむ登山、即ち近代登山を  
 教え、また、日本山岳会ができるきっかけを  
 作った恩人として、その功績をたたえている  
 のである。ウエストンには「日本アルプス登  
 山と探検」、「極東の遊歩場」の二冊の著書  
 があるが、特に前者は日本アルプスの名を世  
 界に広めた力は多大であった。この著書の中  
 にT・HORIの写真が載せられている。即  
 ち「槍ヶ岳の南麓」、「乗鞍岳の麓白温泉水  
 浴場」、「北東より見たる槍ヶ岳」、「東南より  
 見たる穂高山」の四枚である。  
 これまで多くの人が関心を抱き調べている。  
 特にこのことにつき、日本山岳写真史の  
 研究家杉本誠氏は、その著書「山の写真と  
 写真家たち」(講談社)の中で、T・HO  
 RIの謎として詳細に述べられている。  
 それによると「日本アルプス登山と探検」  
 の訳者岡村精一は、昭和八年発行の梓書房  
 版ではT・HORIを「堀」、二十八年の  
 創元社版でも「堀」。  
 しかし三十八年の角川文庫版には「保利」  
 と変えている。またその後の他の訳者は皆「保  
 里」と改めていると言う。即ち最初の訳本か  
 ら約五十年間に、堀→保利→保里と移り変わ  
 ったことを明らかにしている。そして明治四  
 十一年の日本山岳会の機関誌「山岳」掲載の  
 高野鷹蔵の次のような記事を掲げている。  
 「松本は日本アルプスに入る関門の地であ  
 る。此地にある数軒の写真店には定めし珍ら  
 しい印画もあらうとは、誰しも想像するであ  
 るが事実此れに反して唯だ僅かに保里写  
 真館にあるのみである。(同市辰巳町)これと  
 も主として白馬方面に限られて他のは余  
 りないのではあれど、同館では此の写真を書  
 す為には技手が十八日も白馬頂上に籠居したさ  
 うである。蓋し同館技手の得意とする所で山  
 岳写真としては美事なものが多い。且つ同館  
 では追々各地の写真撮影して、登山客の為  
 には特に廉価に販売すると云ふ事である。吾  
 人としては一日も速かに然かあらん事を希望  
 して止まぬのである。登山客は此れによつて  
 記念すべく、商売は以て利を得べきである。」  
 (杉本誠「山の写真と写真家たち」より転載)  
 このように実際に山の写真を撮影したのは保  
 里写真館の館主でなく技手であったことを明



保里写真館(昭和25年頃?穂莉貞雄撮影)

らかにしている。この件につき私の父三寿雄  
 も昭和二十九年七月の「川柳しなの」に於て  
 当時の保里写真館の写真を添えて次のように  
 述べている。  
 「日本アルプスを世界に紹介した有名なウ  
 エストン著「日本アルプス登山と探検」に掲  
 載されてある槍ヶ岳や穂高岳の写真に「堀写  
 真」と説明してあるのは、当時松本の保里写真  
 館の技士安藤鶴一郎氏の撮影したものである。  
 同氏は明治二十八年にウエストン氏と御岳に  
 登山して居り、又上高地から槍ヶ岳へ四切形  
 の大型の写真機を人夫に背負はせて登山して  
 る事を確知してある。其の頃、既に山岳写  
 真を寫した写真家が松本に居た事は何として  
 も嬉しい話である。保里写真館は其の後幾度  
 か経営者は変わったが、其の古い特殊な建物は  
 神道の東に現存してゐる。」(原文のまま)  
 保里写真館は昔の町名で辰巳町にあり、建  
 物は町名が大手四丁目と変わって居る。現物  
 の外観はそのままで、父の言う如く現在は大  
 沢写真館になっている。昔から私の家とは三  
 四百米程しか離れていないから、父は安藤鶴  
 一郎から直接話を聞いたのか、或いは保里の  
 関係者から聞いたのか今となってはわからな  
 いが、とにかく確知しているのである。私も  
 子供の頃、神道(四柱神社とも言う)の庭で

遊んだり、この保里の前を通り幼稚園へ通つたので、当時の三階建、白壁の土蔵造りの立派な建物をよく覚えて居る。  
 父は大正六年、町内の仲間達と槍沢小屋を作つて山小屋を経営すると共に、昭和の初めに松本に写真館を開設。また山岳写真を撮影して保里写真館同様に印画を販売したので、保里写真館主の保里高政を大先輩として尊敬していたのである。昭和六十一年夏、松本市で国際アルピニスト大会が開催されることになり、そのイベントの一つとして、杉本誠氏が収集した日本山岳写真史上最初の人と言われる河野龍蔵その他昔の写真家の山岳写真と共に、イタリアの探検家にして登山家のウイットリオ・セツラの写真展が、日本ではじめて松本市で開催されることになった。その時來松された杉本氏を、私は駅近くの極楽寺にある保里の墓へ案内した。その墓石には「保里高政夫婦之墓」と大きく刻まれた大変立派な墓である。杉本氏はその立派さに驚き暫くじつと眺めていたが当時の山の写真が見つくと大きな反響を呼ぶことは間違いないと洩らされた。松本で生まれ育つて昔から保里の名前に親しみを感じている私は、機会があったら是非調べてみようと思つて居た。今までのこの墓の存在は一部のみに知られて居るだけで、しかもその子孫について調べた人はいないようであった。寺の住職に尋ねると、家族が時々墓参りに来ているとのこと、その名前、住所は直にわかつたのである。早速手紙で問合せてもらったところ、暫くして丁寧な返書を頂き、驚きと共に大いに感激した。  
 それによると保里高政は通称で、本名は高橋彌助と言ひ、弘化四年(一八四七)生まれである。今まで通称の保里のみを調べて本名を調べないのでわかる筈がなかつたのである。松本には明治時代、杉浦・保里・宮沢・白鳥など数軒の写真館があつたが、なかでも保里は二番目に古い。高政は写真を横浜で習つたらしい。というのは大町市社館内の人、

伊藤喜代松(明治五年生まれ昭和四十一年九十四才で没)が生前に語ったところによると保里と横浜で写真を書いた、信州へ帰ってからは保里は松本で、伊藤は大町にて写真業をはじめたと言う。何れにしても明治の草昧期に早くも写真を書いた写真館を経営、しかも山岳写真販売にまで着目したその眼力は並大抵のものではない。明治二十一年の松本の大火に遭い旧宅を三階建ての土蔵造りに建て替えたが、その智力、財力は相当のものであったと推察できるのである。

高政の妻「はま」は信州松代出身、二人の間に子がないため、はまと同郷の忠雄(明治十六年生まれ)を十四才の時養子にしている。

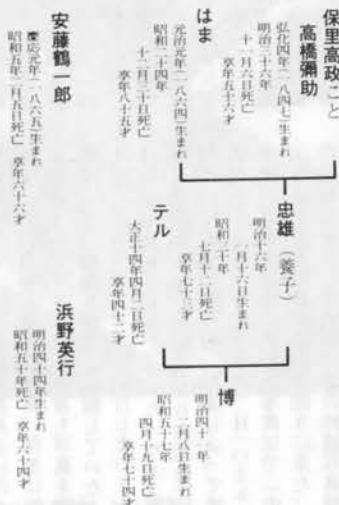
技士の安藤鶴一郎は慶応元年(一八六五)生まれ。高政より十七才年下で、誠実勤勉の入で高政によく仕えていたが高政が明治三十八年十一月五十六才にて死亡した後も、二十才になったばかりの若い主人忠雄を助け写真館をきりもりしている。



保里高政像(松本民俗資料館蔵)

忠雄は若い頃、上高地の五千尺旅館に長期滞在して、河童橋畔で記念写真を書いていたこともあったというが彼は格式高い士族の末子で性格は生真面目。人に頭を下げることが嫌いであったから商人にはむかない人であったらしい。大正十四年、妻のテルが末子を産後後亡くなったので、その淋しさもあり、十分な酒の量があふえ生活が乱れ勝ちになったので、驚きしていた保里写真館の身代もかなり傾きかけたことと、保里には何人かの弟子がいたようであるが、独立して写真館を営む者など保里を去る人があった。しかしその里の中にあつて安藤は一生涯を保里のために働き、昭和五年に六十六才で亡くなつていたのである。安藤の一人息子は惜しくも十七才頃病没。安藤未亡人は写真館近くに住み、和服の仕立てで生計を立てていたが、なかなかの美人であり上品な人であつたという。晩年は実弟の里見某に身を寄せ、時々保里に遊びに来ていた。

忠雄の子供の二男二女ははまが面倒をみていたが、一家の生計は商売下手な主人にかかり専ら安藤が支えねばならなかつたので、その重圧は大変なものであつたと思つた。その昔、保里から独立してそれそれ写真館を開いた坂田穂積、矢島英一郎は何れも故人となつていないのは残念である。孫達は子供の頃、安藤からよく山の話や聞かされたという。安藤が若い頃、ワラジをはいで暗箱、乾板など重い荷物をかついで山を登つた話、山で野宿して恐ろしかった妖怪の話を書き手ぶり、面白おかしく話をされたが、大変話上手な方であつたと孫の一人は昔のことを思い出して語ってくれた。そして孫達は苦労したが、成人できたのは安藤の御蔭であると言つて感謝していると言つてゐる。



安藤鶴一郎像(高橋正子蔵)

その未亡人は現在も健在である。未亡人によると、博は安藤の遺品の入った包みを大事にし片時も離さず持ち続けたと言うが、その遺品は現在も高橋家に保管されてゐる。その中味は句集が大部分で、一冊に約八百首載せられた和紙の手帖が五冊、大学ノ一七七冊にびつたり達筆の毛筆で書いたもの、また博が安藤氏遺墨集と記した手帖など、その他甚闊係の新聞の切抜帳や暮の本など沢山あり、晩年はいろいろと趣味に生きた風流の人であつたらしい。安藤は松雲という号で俳句を作つていたので、その人柄が偲ばれる俳句を次に記してみる。(仮名遣いその他は原文のまま)

義理という二字の重さやとしの坂  
苦学する子に賢母あり桃の里  
母持たぬ淋しさを突く手まりかな  
(忠雄には二人の娘があつた。)

千城の男児生れて五月鯉  
(忠雄の妻テルは大正十四年末子を産み間もなく死去。子供達は高政の未亡人が養育。)

酔ひ臥して酒顔童子に蚊のむるる  
凍みる夜や酒顔童子の高軒  
(この二句は大酒家の忠雄のことか。)

一門の写真をとるなり松の内  
(保里の弟子坂田にこの写真がある由。)

古雛や母の年問ふ姉妹  
姉に唄頼みて妹のてまりかな  
(子供達への暖かい情が伝わってくる。)

絵日傘や小さき足に母の下駄  
乳もらひに貸して見送る日傘かな

俳句は大正十二年から十四年頃までの晩年のものが殆どで山の俳句は見当たらないが、句そのものが絵が写真を見ようような美しい自然の風景を読んだものが多い。そうしたものを次に掲げる。

雉子鳴くや山の曙杉の闇  
雁去て北越の山雨けむる  
蝶舞ふや写生の絵具陽に乾く  
三尺の妻千丈の雲雀かな  
散るや花浮世は夢の会者定離  
官林に川一筋や冬の月  
目を閉て探る詩境や時鳥  
分け入らん道ある限り春の山  
朝写す流れは瘦せて雲の峰  
写真機に拾ふ名所や春の風  
碁を囲む音静かなり青簾  
碁敵の夜打に雪の積りけり  
口切や教へた人の客になる  
口切や昔竹馬の友白髪  
口切や浮世を捨てし顔そろひ

(暮と共にお茶にも趣味があった様である  
口切とは新茶を入れたつぼの封を切つて  
行う茶会を言う。)

以上の句を沢山ある中から抜萃して未亡人は送つてくれ、「これらが安藤鶴一郎氏の人柄を思ふすがとなれば幸である。更に「(安藤氏が)傾きかけた保里写真館を身を以て支え続けた義理人情に厚い誠実な人柄ではなかつたかと想像いたしますが、反面それ以上に保里高政が大人物ではなかつたかということも思はれます。家に背き通した亡夫(博)が名古屋で不治の病を宣告され自分の大切な荷物だけ整理する為に病院から外泊を許され息子の所へ参りましたその時、安藤氏のこの荷物をに入れていたということは亡夫にとつて安藤氏はかけがえのない大恩人だつたからだと思つています。」とお手紙に書き添えてあつた。昭和の初め頃、保里の待合室には山の写真の遺品の包みにも残念ながら山の写真はなかつたが、彼の遺された俳句により、誠実な人柄、愛情のこまやかなすばらしい人間であり、自然に対する観照の深さも思はれて、当時の松本の文化人としても一流であり、彼は単なる保里の使用人ではなく、高政亡き後は実質的な経営者であつたと言つてよい。杉本誠氏がその著書に於て「日本の山岳写真家第一号は安藤鶴一郎かといわれると、即座に返答しかねる。彼の登山暦や山の考え方が、今となつてはほとんどわからないのと同じに、主人の要請に従つて販売用の写真撮影を第一の目的にして入山している点など引つかるのだ。「行け」といわねばならぬ、あるいは山に登つていないかも知れない。もしそうだとすれば、写真技師ではあつても登山家とはいえない。」と指摘しているが、私が今まで述べた彼の生きざま遺品の俳句などにより、その考えは訂正せざるを得ないのではないかと思ふのである。彼は主人の命令だけで山へ

登つたとは考えられない。

彼が本当に山が好きでなければ、前記の高野鷹蔵の「技手が十八日も白馬頂上に籠居したさうである」ということが出来る筈はないのである。彼は山が心から好きで登山家であつたからこそ高政の命令に喜んで山の写真を写しに出かけたのではあるまいか。杉本誠氏は日本山岳写真の第一号は明治三十六年八月二十二日の「赤石山嶺に於ける高山植物」を撮影した河野齡蔵としてゐるが、ウエストン研究家三井嘉雄氏によれば、安藤は明治二十七年八月、槍ヶ岳に写真撮影に出かけている。これは河野齡蔵より九年も早い。彼の撮影したガラス乾板、印画はまだ発見されないが、ウエストンの著書に印刷されて残つてゐる以上、安藤鶴一郎を日本山岳写真家第一号としても差支えないのではなからうか。



(高橋正子蔵)

話は余談になるが、安藤亡き後も保里写真館を守つたもう一人の人物、浜野英行(明治四十四年生まれ昭和五十年死亡)がゐる。彼は高等小学校を卒業して直に保里に弟子入りして人物撮影の他に写真製版を習ひ、太平洋戦争が激化した昭和十九年、徴用されて日本鋼管に入るまで保里で働いた。これもまた誠実勤勉の人でよく保里のため尽力したので、「はま」は写真館の東隣りの持家一軒を浜野に与えてゐる。浜野の未亡人は健在で、当時の模様をこまごま聞くことができた。それによると高政の未亡人はまは孫の幸彦と住み、彼を大変可愛がつてゐたが、武家の出らしく言葉遣いが丁寧で礼儀正しく、また大変に几帳面の人であつた。また、終日長火鉢の前に姿勢正しく座つてゐた姿を思い出すと、当時をなつかしみ話をされた。浜野が戦後復員し

て帰る頃、保里写真館は完全に閉鎖されていたので、地元新聞社の製版へ転職した。昭和二十年四月まで保里にいた浜野未亡人によると、倉庫にはガラス乾板が沢山整理されてあつたと言ふが、その後建物が人手に渡つたのでその行方は全くわからなくなつてしまつた。私は各方面に問い合はせたが、保里撮影の人物写真松本市内の風景写真などはあつても山の写真は今のところ全く見当たらない。T・HORIの写真はウエストンの本以外にも各種の出版物に使用されたと思はれるが、その撮影者名の表示がないのではつきりしないのである。

三井嘉雄氏によると、最近英国山岳会の蔵書の中にウエストンの日記が保管されてゐることが判明。その中に明治二十七年ウエストンが笠ヶ岳に登頂後上高地に入り、徳本峠を越えて下山の途中、島々谷の風呂平で、「私のため穂高山と槍ヶ岳の風景を撮りに行く写真屋の保里に道であつた。更にウエストンが常念

岳に登つて松本に帰つてから「私のために穂高山などの景色を写しに行つてゐる写真屋の保里を訪ねた」という記事があるとのことである。この当時安藤は三十才、保里は四十七才であつた。ウエストン自身も写真を撮つたので、その現像を保里に依頼してゐたようである。一方ウエストンに同行したハミルトンは杉浦写真館を利用してゐた。ウエストンは笠ヶ岳登頂の前に糸魚川から白馬岳に登つて松本の信濃屋に来た時「杉浦によつて感謝の表現として菓子を出された。H(ハミルトン)が昨日写真を現像に出した写真屋で(中略)スライドを写真にするのか聞きに来た。」との記載もあるのである。この杉浦写真館(館主は杉浦平一)は松本の最初の写真館であり、

古い写真には杉浦撮影のものが数多く残されている。明治三十八年、松本の高美書店から発行された「槍が嶽乃美観」にも梓川を渡渉の写真「米人溪流を渉る」など杉浦撮影の写真がある。

アルプスの玄関口松本には明治時代近代登山の実践者として数多くの外国人が訪れたので、松本にも登山の気風が興り、早くも山岳写真に関心を抱く保里高政のような大人物が出現したのである。高政は安藤を山岳写真家として育てた。十分な登山用具もなく泊る山小屋もない全く不便な時代に、重い写真機材を背負つて山へ入ることは大変な苦勞であつたが、安藤はどんな苦難にも耐えて山岳写真撮影のため度々登山したものである。

この度の調査でT・HORIの山岳写真を発掘することは残念ながらできなかったが、私にはいろいろと得る所があり、幸に思つてゐる。その第一に、人情紙よりも薄いといわれる現代では到底考えられない明治の人の義理人情の厚さ、誠実さを安藤鶴一郎、浜野英行らの人生を通して心にしみて知つたことは誠にうれしく思つてゐる。

今回保里高政の子孫高橋家の深い御理解や浜野未亡人など関係者から貴重なお話を聞くことができたことに心から感謝申し上げます。T・HORIの山岳写真の印画が今後発掘できることを祈つて筆をおく。(文中敬称を略させて頂きました)

(槍岳山荘・槍沢ロッジ経営)

山と博物館 第33巻 第6号

発行所 長野県大町市 TEL 0261-2211  
大町山岳博物館  
印刷所 長野県大町市 大栄タイムス印刷部  
定価 年額 一、二〇〇円(送料共切手不可)  
郵便振替口座番号(長野)四一三三九二